

ガラパゴス

高橋 章浩 (新4回生)

敗戦後の日本は混乱し悲惨だった。教科書は新聞紙よりも粗末な印刷物で、文房具も自由には買えない時代だった。戦闘帽に国民服、軍靴か下駄ばきの何とも様にならない格好で通学した。

私の住む町内には山中順三先生(英語)、小林博先生(歴史)、佐藤恭六郎先生(英語)、足澤至先生(体育)の四人の先生方が住んでおられた。常に先生方の目が光っているように悪さもできず、勉学に励むことができた。

各教科の先生方はその道の大家ばかりで、授業は新鮮で魅力的であった。私の青春時代は旭におう桜花のように輝いていた。自然科学の世界に魅せられ、化学を専攻するよう

になったのも、世界の美術や語学、西洋文化の世界に導かれたのも、中高の青春時代の知識欲旺盛な時の授業や書物から吸収されたものである。高校の教師になつてからも、自然科学の他にどんな教科を担当しても、対応できたのも青春時代に学んだ基礎があったからだ。教師になつて転任する毎に、ニックネームも変わる。テラさん、アゴさん、Bさん、ロツパさん、デンスケさん、岩中時代の恩師のニックネームも今は懐かしい。

私にはミトコンドリアとかガラパゴスのニックネームがあった。

一九八八年の夏、私は南米エクアドルのガラパゴス諸島に渡つた。ガラパゴス島は一六

世紀にパナマの宣教師ベルランガによって偶然に発見されて以来、この島は極端な水不足のため人の定住を拒んできた。一八三五年に英国の博物学者チャールス・ダーウィンは学術探検船ビーグル号でガラパゴスに上陸して島々を回り、ビーグル号航海記の中に初めてガラパゴスの不思議な生物たちについて書いている。二〇年後に彼は名著「種の起源」の中で生物進化論を展開し、生物学ばかりではなく、世界の思想界に革命的な影響を及ぼすことになった。

ガラパゴスとはスペイン語で亀のことである。エクアドルという国名もスペイン語で赤道という語で、赤道に位置する国である。首都のキトはコロンビアからペルーまで続くアンデス山脈の中にあり、標高二八五〇メートルの高原都市で、岩手山の標高は二〇四一メートルであるから、北アルプスの山頂に都市があることになる。標高四五〇〇メートルのピ

チンチャ火山麓に広がっている都市は、山坂が多く、ゆっくり歩いていても登りは呼吸が乱れ足が重くなる。住民はインディオとメステイソ（混血）が中心で、一部白人と黒人がおり、言語はスペイン語である。

ガラパゴスは海洋に誕生した火山島で、はじめ生物は存在しなかった。南米大陸の大洪水で流木などの天然の筏に乗った動植物が沖へ流出し、フンボルト海流で二〇〇〇キロメートルも移動して漂着した。ノースセイモア島、エスパニョラ島、フロレアーナ島、サンタクルス島、プラザ島、ラビダ島、サンチャゴ島の七島を船で回り、その島々に適応して生存する動植物を調査したのである。

昭和三四年にガラパゴス学術調査団に同行した日本人の記録によると、船で太平洋を航海して三七日もかけ、この島に到着している。現在ではジェット機を乗りついで三日で島へ渡ることができる。隔世の感ひとしおである。

現在、サンタクルス島南岸のアカデミー湾近くに、ユネスコ国際自然保護連合の協力を得てダーウィン研究所が建設されて、ガラパゴスの研究と保護の活動がなされている。

ガラパゴス調査の旅で、ガラパゴスの地理的条件や海流と気象、動植物の生態を自分の目で確認できた。一五〇年以上も前にダーウィンが観察した現地で、生物進化論に登場する生物の子孫に会った感激は百聞は一見に如かず、貴重な体験であった。南米のインディオや同行したドイツ人やフランス人、スペイン人、アメリカ人たちとの交流や南米の異文化に接した感動は忘れられない。以来授業でガラパゴスの見聞を語ることになり、遂にガラパゴスのニックネームを頂戴した。ガラパゴスの如くゆっくり、たゆまず生きて、世界を回り、山と旅の人生から自然保護と人間の在り方を追求しようと思う。

（有限会社カナンフーズカナン食品次長）



戦闘帽に石桜の徽章、国民服にゲートル、下駄ばきが正規の通学服（昭和21年頃）